大本山永平寺

報恩授戒会

雪に閉ざされる冬も終わり、草木の芽吹きとともに春の暖かさが感じられるようになりました。ここ永平寺では、四月二十三日より二十九日までの一週間、報恩授戒会が厳かに勤められます。

報恩授戒会とは、お釈迦さまの尊いご戒法が歴代のお祖師さまを経て、永平寺七十九世福山諦法不老閣猊下へ伝わり、更に授戒会に参加される戒弟の皆さんへと伝授される儀式のことです。

毎年一〇〇名を超える戒弟の方々が一週間寝食を共にし、坐禅、礼仏、看経、聞法、巡堂等の修行に励みます。また、そのために全国から大勢のご寺院さまが集まり、滞りなく授戒会が進められるようご荷担くださいます。

戒を授かるということは、仏の教えを我が身に照らし、我が非に気づき、それを正すべく実践していくこととされます。

ただわが身をも心をも放ち忘れて　仏の家に投げ入れて
仏のかたより行われて　これに随いもて行く時
力をもいれず　心をも費やさずして　生死を離れ　仏となる

一週間調えられた環境に身を置き、素直な心で仏の行をおこなう時、知らず知らずのうちに皆尊い仏そのものとなられます。

皆さまにも是非この尊きご縁を賜る報恩授戒会をお勧めいたします。

大本山永平寺／０７７６-６３-３１０２

大本山總持寺

観音の大悲の桜　咲きにけり

「桜プロジェクト」で仏殿の前に植えられている苗木が可愛らしい花を咲かせ、境内は賑やかな雰囲気に包まれております。

總持寺では毎年四月十日から十六日まで「報恩大授戒会」、いわゆるお授戒会が修行され、戒師を貫首の江川辰三禅師さまが勤められます。

この大授戒会は、お釈迦さまはじめ、總持寺を開かれた瑩山禅師さま、それを相承（そうじょう）された峨山禅師さま、そして歴代祖師方が伝えられて来た御戒法を戒弟にお授けする曹洞宗で最も重要な儀式の一つです。

戒を授かることは仏教の根本の教えをいただくことであり、禅の心を得るということです。戒弟の皆さまは七日間、坐禅や礼拝・聞法を通して一心に修行に励むのです。

越後の良寛さんに次のような詩があります。

花　無心にして蝶を招き、蝶　無心にして花を尋ぬ

自然のままに花が咲き自然のままに蝶が訪れる風景を詠んだものです。「無心」は禅でいう「只管（しかん）」です。つまり「ひたすらに」「ひとすじに」ということになります。

大授戒会もまさに法の花・大悲の花がひたすらに、そしてひとすじに咲き誇る期間といえましょう。

タイトルに、正岡子規の句を引用しました。

大本山總持寺／０４５－５８１－６０２１

曹洞俳壇

選・村松五灰子

俎板は桧の柾目薺打つ

千葉県　**蛭名　節昌**

評　一月七日、七草粥を頂く。樹齢を重ねた太い桧から柾目の板を取る。真新しい白い俎板にみどりの薺を打つ。さらりとした表現に新年の心地良い響きが伝わりくる一句である。

呼び声のやがて遠のき焼藷屋

山口県　**糸山　栄子**

評　この頃の流しの焼藷屋は軽トラが多い。買おうか躊躇しているうちにマイクの音が離れて行く。焼藷に少し心が動いたさまが巧みに語られている。

◆詩に遠くなりたる思ひ着ぶくれて　山口県　御江やよひ

◆三陸の秋刀魚家族の数を買ふ　岐阜県　千藤　恵三

◆尊徳像寂しき日なり卒業歌　秋田県　小田嶌恭葉

◆大年のことりともせず母の部屋　三重県　米野てるみ

◆雪を踏む黒一点の修行僧　東京都　瀬沼　利雄

◆時雨るるや高層を背に阿弥陀堂　愛知県　松井　暁美

◆地酒など揃へ年賀の客を待つ　岩手県　上沖　貞子

◆還暦のスタートラインに初日さす　福岡県　安部　正和

◆初日背の彼方に日本ある筈よ　ロスアンゼルス　井上　健一

◆乗り継ぎて母病む街や初霰　宮城県　木村とみ子

＊選者吟

遠目にもエレベーターの春灯

五灰子

＊作句小見

咲き満ちてこぼるる花もなかりけり　高濱虚子

一樹の桜が見事に満開に咲き極った。一片も零さず閑かな緊張感の漂う句です。一本の桜、公園の桜、夜桜等。西行もまた我々の心も離さない不思議な桜です。

曹洞歌壇

選・長澤　ちづ

侘助の花の数よむ亡妻の声空耳にきく冬のはじまり

鳥取県　**峰地　三義**

評　侘助の花を好まれた方だったのか、あるいは咲くころに亡くなられたのだろう。作者にとって、花を数える亡き妻の声が甦ることで冬ははじまる。ただでさえ物寂しい初冬であるが、侘助の花の色に慰められてもいるに違いない。

肩車しつつ鳥居の注連潜る子のつむりにて幣を揺らして

新潟県　**星野　三興**

評　穏やかな新年の様子がさり気なく詠われ、情景が目に浮かぶ一首。「つむり」「ぬさ」の語感もよく、初句の肩車の危うさを結句の揺れが受けている点にも工夫が感じられる。

◆境内に一気に落ちる紅葉は温きけものの気配を持てり

岐阜県　後藤　進

◆幸せも辛さも僅かに違うだけここ福島に生きるわれには

福島県　大槻　弘

◆震災後三年経つも除染なく七草を摘む人影も無し

福島県　佐藤　忠

◆今朝の凍みを言いつつ寄れる道の辺の焚火は人を親しくもする

長野県　毛涯　潤

◆分度器のような半月うっすらと白き真昼の月となりゆく

茨城県　太田　弘美

◆渾身の力に研ぎし包丁はとんとん拍子におせちをきざむ

三重県　野呂　と志

◆女にて生まざることのかなしみは生ある限り消ゆることなし

長野県　中野田糸子

◆防潮林津波に消えし松原に実生の芽生え力わきくる

岩手県　関合　新一

◆興龍寺の石段踏みしめ登りゆく吾子青年のままに十七回忌

長野県　南山　時子

◆宿坊に初めて泊り眺むれば常とはちがう善光寺さん

長野県　太田　舛次

＊選者詠

彩りどりの餅花小枝に涸ぶとも供えられたるお堂明るし

ちづ

＊作歌小見

餅花は小さく丸めた餅や米粉で作った団子に色を付け、柳の枝などに刺したもの。小正月に豊作を祈り供えるとか。散歩道の観音堂に飾られていて何か温かい気持になりました。太田弘美さんの歌、分度器の比喩が光ります。